

後1年以内の個体の playmate は、同年令、1年年長個体が大部分であるといえる。

2才のコドモの playmate の年齢についてみると、同年令個体が相手の場合と、そうでない場合の差はアカンボ期のものより縮まり、相手個体との年齢差は広がって来るが、その差が1年以内の個体に集中するという傾向はアカンボ期と同様である。しかし、この場合、年齢差1年が上下にあるので、つきあいの幅はアカンボ期より大いに広がっている。

次に playmate における血縁関係について検討を行なう。血縁の濃さと大きく関連を持つ行動の多くは親和的な関係であり、特に grooming 関係は血縁関係と大きな相関を示す。コドモ期までは groomee になることが多く、安定した groomer の役割を長時間にわたって果たすことは少ない。しかも、生後1年以内の個体では母親との間に行なわれるのがほとんどで、母親以外の個体との間に行なわれるのは数パーセントにすぎない。2才の個体になると、平均して全体の約53%が母親との間に行なわれ、それに sibling 間で行なわれたものを加えると84%になる。R-T play や mounting play についてみると、年齢差の少ない sibling をのぞくと、大きなかたよりは見られない。つまり、playmate の選択は血縁関係への依存が他の親和的な行動に比して少いといえる。

以上、playmate を中心とした社会関係の分析を行なった。群れの integration を支えている大きな秩序系の一つに血縁関係がある。いくつかの血縁集団の集合を integrate するものとしては、リーダー制等があるが、その他に子供の集団があり、その集団の communication system として、playmate の広がりを考える必要があることを指摘したい。遊び、とくに R-T play は、コドモ期にのみあって、オトナ期には姿を消すので、遊びがもっている社会的意義については、今まであまりふれられなかった。しかし、コドモ期に遊び仲間として、親和的な関係を作りあげた個体間のつながりは、成長してからも血縁集団間をつなぐ鎖にもなり得るであろうし、各々の年齢集団をつなぐ横の鎖にもなり得るであろう。親和的な社会関係の中で、血縁関係とは別の social system として、遊び仲間関係をあげることができるであろう。

“視覚言語”の獲得—チンパンジーの場合—

室伏 靖子（京大・霊長研）

一般に、“言語”はヒトのみがもつ特性として、ヒトが他の動物から区別されるひとつの指標であると考えられてきました。だから、近年チンパンジーに“ことば”

を教えることに成功したという Gardner 夫妻（1969, 1971）および Premack（1970, 1971, 1972）の研究は、色々の意味で反響を呼んだようであります。ここでは、それらの事実をできるだけ具体的に理解し（くわしくは、浅野・室伏, 1972）、偶然にも同じ時期に、非常に異なった視点から行なわれたこれら2つの研究の意味を、行動への実験的アプローチとして位置づけることを試みました。しかし、本来の目的であったそれらの行動の基礎に考えられる心理学的メカニズムは何であるか、またそれらがヒトの“言語”への進化の過程を考える場合の手がかりとなりうるか否かについて、十分に述べるのができなかったことを、司会者ならびに企画者におわびいたします。これらの点については、思想8月号（室伏, 1973）を参照していただければ幸いです。以下、文献を明記するにとどめます。

文 献

- 浅野俊夫・室伏靖子（1972）：霊長類におけるコミュニケーション研究の動向。言語 1：484—492。
- Gardner, R. A. & B. T. Gardner (1969): Teaching sign language to a chimpanzee. *Science* 165:664-672.
- Gardner, B. T. and R. A. Gardner (1971): Twoway communication with an infant chimpanzee. In *Behavior of nonhuman primates*, Vol. 4 (A.M. Schrier and F. Stollnitz, eds.) pp. 117-184. Academic Press, New York.
- 室伏靖子（1973）：動物の“ことば”—その行動的基礎—。思想8月号：24—35。
- Premack, D. (1970): A functional analysis of language. *J. exp. Anal. Behav.* 14:107-125.
- Premack, D. (1971): Language in chimpanzee? *Science* 172:808-822.
- Premack, D. (1971): On the assessment of language competence in the chimpanzee. In *Behavior of nonhuman primates*, Vol. 4 (A.M. Schrier and F. Stollnitz, eds.) pp. 185-228. Academic Press, New York.
- Premack, D. (1972): Two problems in cognition: Symbolization, and from icon to phoneme. In *Communication and affect* (T. Alloway, L. Krames and P. Pliner, eds.) pp. 51-65. Academic Press, New York.